

## 編集後記

○「文教国文学」も二十号となった（文学部国文学科第一回生が中心になって作ったガリ版刷三部を入れれば、二十三号ということになる）、ありがたいことである。当初は年一回発行であったが、近年は毎年二回発行ということを続けていて、思ったより早く二十号という声を聞いたのである。二十号ということになれば「成人式」である。何か緊張して企画ものをという意見も出たのであるが、これは本学の国文学科の教師によるオールスターキャストでの執筆というのはいかがかということになり、大方の賛成で「全員論文を書け！ 頑張れ！」ということになった。

○現在、本学の国文学科に所属するスタッフは、文学部と短期大学の国文学科の人が一緒に研究と教育に当たるとともに、書道専修所属の先生方も一統様であり、一般教育の国史学などの先生方も一緒に仕事をしている関係で、全てで十七名という大所帯である。そのうち数名脱落しても相当部厚いものになるであろうという予測のもとに編集を始めたのであるが、いざとなるとなかなか集まらないものである。締切期限を次から次へ

と延長して、遂には年間二回発刊の内規も破るということになったにもかかわらず、それでも集まらないということで見切り発車、ご覧のごとしである。夫子自身も見切り発車された側なので二の句がつけられないのであるが、かくのごときを世に龍頭蛇尾と申します。ただ、論文の数においては蛇尾ながら、その質においては龍頭也と思料するが、いかがであらうか。

○「文教国文学」第二十号掲載の論文数こそ蛇尾に終わったけれど、本学国文学科にみない研究意欲は、近い将来における稔りを予感させるものがある。大学院生も今年四名入学し、演習などのハードスケジュールで少々多忙の悲鳴をあげながらも、楽しく研究生活を満喫しているようであり、これらが一体化して、この一二年のうちに一定の成果を挙げらるであろうと確信している、期してまつべしである。

○本学では、昨年度から研究出版委員会なるものが成立して、学内の研究活動の活性化に取り組むこととなった。国文学科に關係したもので言えば、本学に併設されている地域文化研究所の発刊という形ではあるが、永年の芸備俳諧史研究の成果の一端を、下垣内和人

教授が自身の編集翻刻で『芸備俳諧資料集』一として発表された。昨年十一月二十二・三日の両日、本学の主催で日本近世文学会秋季大会が広島ガーデンパレスで開催されたが、その席上で参会者に配布した。大変好評であったようである。この資料集は三巻まで計画されている。また『読本研究』初輯も発刊された。本学において企画編集したものであるが、全国の読本研究者が多数執筆くださった。『忠臣水滸伝』を模した和綴の装幀ともども評判のようである（これを自画自賛と申します）。これは毎年一回発刊予定で、もし私に生あって第十輯まで続刊できれば、近世小説の中で最もすれば等閑視されがちなであった読本の研究が一步でも新しい局面を開き得るのではないかと期待している。これだけに限らず、現在あれこれの研究企画が樹てられており、研究活動の活性化が胎動しているようである。再言、期してまつべし。

○前述、本学が主催校となって日本近世文学会秋季大会が、昨秋開催された。その際、下垣内教授のお力によって、広島市立中央図書館を会場としての近世文学資料展も開かれた。芸備地方の俳諧資料を中心とする展示であったが、大好評であったようである。とこ

ろで、こういう学会は、元来本学内で会場を設営すべきであつたけれど、宿泊施設が安佐北区地域には少なく、当然旧広島市内のそれを利用しなくてはならない、とすると可部街道の交通事情が太田川橋周辺を中心に極端に悪い、こんな諸事情を勘案して、大学当局の援助をいただいて、私学共済の施設としてオープンしたばかりの広島ガーデンパレスを会場として開会した次第である。約半年あまりの準備期間、大会当日の二日間、本学の先生方が一致協力、骨身をおしまずに仕事をしてくださり、学生諸君も無償奉仕してくれて錦上花を添え、地方開催の近世文学の学会としては極めて盛会裡に終了することができた。

先生方の「一致協力」というのは、それぞれ専門を異にしていることであるし、言うは易く行ふは難いというのが一般であるが、それぞれの担当分野は異にしていながら、学会を盛り上げるという一点で一致して見事に学会を運営してくださった。ありがたいことである、ここが本学の好い意味での特色と言えるかも知れないけれど。

○演習風景報告一件、文学部国文学科二年生の国文学演習Ⅱは、相変わらず「おくのほそ道」をテキストとしての読解演習、十年一日

どころか二十年一日のごとしであるが、近世の文学作品の中では最も注釈書多く、調べるということでは最適のものとて、変わり映えのしないこと承知の上での演習、こちら側が下調べ不全症での行き当たりばったりとて学生諸嬢にはご迷惑であるが、思い付きの皮肉と毒舌に閉口してか、とにかく彼女たちなりに懸命に調べてきてくれる。それだけに、二十年一日のごとしではあっても、学生たちとの応答の間には、鈍根の私ゆえに毎年何か新しい啓示が与えられる。ありがたいことである。

○「おくのほそ道」の「尾花沢」での記述は、豪商ながら風流人清風の「志いやしから」ざるをたたえて、曾良の句も含めて四句採録していることで特徴的である。一般の評価に従えば、平泉の名句あって尾花沢、更に立石寺、最上川の佳句あって羽黒で四句（「有難や」の句を入れると五句となる。）、象瀉で五句、金沢で四句という具合に、句の採録の多いところが並んでいく、その発端に尾花沢は位置する。芭蕉の句境の高まりを、芭蕉自身自覚して、こういうように多くの句を採り入れたとしてよいであろう。それだけに、このあたりの句に対する評価は高く、注解も

詳細を極める。ただそれらの中で、曾良の句に対しては評価が低く、それだけに手抜き注解もあるごとくである。尾花沢にも曾良の句が採録してある。「蠶飼する人は古代のすがた哉 曾良」という句である。

○「蠶飼する人は」については問題はない、「古代のすがた」については学生は、諸注釈をストレートに理解して「女の人の人たちの姿は、古代の女性たちを思い出させる。」（語彙の解釈が用例を含めて新鮮であり、文庫本としては便利な講談社版の現代語訳である。）などと表現し、これも「なにか、万葉の世界に知らず知らず引きこまれるような思いである。」といった評解に従って多様な鑑賞をする、当方もとんとそれを信じて今まで疑問を提さなかった。諸解一致しているからである。今年は、学生との問答を通じて、ここに言う「古代」を、私どもが歴史学の用語として用いる「古代、中古、中世、近世、近代、現代」の「古代」と全く同じ次元で捉えて理解していることに気付いた。諸注、「全く古代の人の姿のようであることだ」（松尾靖秋氏「おくのほそ道全講」の解）の「ようで」に注意をはらいつつ解を述べているのであるが、学生がストレートに理解してしまうのは必ずしも

無理からぬという記述が多いようである。

○「こたい」という語は、古辞書類にはあまり見当たらないようであるが、「増補雅言集覧」には「こだい古代」とあって源氏の「古代に打しはぶきつ」(薄雲・廿二)など栄花の例も含めて数例挙げられている。名詞も形容動詞も一緒に並べられているが、ここに挙げてある「古代」は、「むかし」とか「古風」とか「年寄じみている」とかいう意に解すべきものであって、石川雅望にも中島広足にも歴史上の時代区分たる「古代」などという語が念頭にあったわけではない。「大言海」も「大日本国語大辞典」も、ほぼ「雅言集覧」を踏襲していて、「大言海」で言えば「(名)古代(一)フルキ時代。オホムカシ。古昔。(二)昔メキタルコト。古風。」と解を示し挙例する、「大日本国語大辞典」には「大鏡」上の例が新しく加わる。「広辞苑」では挙例はないが、「古体①いにしえの姿。いにしえのさま。②漢詩で、古体の詩、即ち四言・五言・七言の古詩及び楽府の総称。」とあり、「古代①古い時代。昔。上代。いにしえ。②ふるめかしいこと。ふるくさいこと。」

③日本歴史の時代区分の一。原始時代のあとをうけて大和・飛鳥・奈良・平安時代をい

う。また、大和・飛鳥時代を古代といい、奈良・平安時代を上代ともいう。」とあって、「古体」と「古代」を区別して別項目に挙げている。学生諸嬢の理解は、即「古代」の③ということになっているのである。

○古語を含めて国語全般を扱う辞典で、「古体」と「古代」を区別しているのは何時頃からそれは知らない、調査すればすぐ判ることとてそれは誰かにおまかせして、昭和十年出版の平凡社の「大辞典」を見るに、すでに「古体」「古態」「古代」の区別あって、「広辞苑」の先縦のごとくである。近時の小学館版「国語大辞典」も「古体」「故態・古態」「古代」の項目あって、「故態・古態」は近代語としての説明であるが、「古体」「古代」は古語としての解あり、従前の解と大差はない、ただ「古代」の○の用例に「浮世草子・武家義理物語・一・四「屋形町のすへに古代より枝葉のさかへたる榎の木あり」と近世のものが載っているところが前進である。ともあれ「古体」「古態」「古代」などの区別をするのは国語辞典ゆえの現象なのであろうが、近時の古語辞典は大・中・小にかかわらず、大よそ「古体」と「古代」を並挙するのが通例のようである。岩波の古語辞典

のごとく、「古代」の項に「平安時代の仮名文学では(古代)か(古体)かの区別が分明でない。」と注記する。小学館の「古語大辞典」には「古代」の項はなくて「古体」の解二つ示して「語誌」の欄に「従来「古代」を当てる場合が多いが、「古代」という漢語には、古風、昔気質などの意はない。「体」は、中国でも日本でも、形、有り様、決まりなどの意に用いられ、「古体」は「旧体」と同義に用いられている。また、「古態」という漢語もあるが、伊呂波字類抄(疊字門)では「古体」のみを掲げている。以上の諸点から、「古体」の漢字を当てるのが適當であろう。「高橋伸幸」とある。それはそれとして、中世から近世にかけて「古代」と表記した文献は多いのであるから、立項しないというのは配慮を欠いた処理とも言えよう。角川の「古語大辞典」はその点明解で、「古体・古態」の解は、「○名・形動ナリ平安時代語。「古体」の表記が古く、のちに「古代」の字も当てるようになったので、あるいは「こだい」と濁音でいうこともあったか。「の」を伴って連体詞のように用いることが多い。昔風であるさま。古くさいという否定的な意味に用いる場合が多い。(として①②③の意味上の

三分類を示す、ここは従前の説に準ずる。用例略”とあり、「古代」の解は、「名・昔・古い時代。今日、現代と対比して、中昔(なかむかし)」などの称呼とともに時代を区分していうのに用いる場合もある。形容動詞のように用いた例も見られるが、これは古体(こたい)に對する当て字と考えられる。「(古)代(こたい)」〔落葉集本篇〕「古代より今日に至るまで」〔正法眼藏・慍麼〕「江州浅井殿の時、屋形町のすへに古代(こたい)より枝葉のさかへたる榎の木あり」〔武家義理物語一・四〕「抑、古代の乱を考ふるに、人皇三十代欽明天皇の十三年に、百済国より仏法を貢物に奉られたる時に」〔国益本論〕とある。古語辞典の解は、ここまで進んできているのであって、これを曾良の句の「古代」に適切に応用して解すればいいのである。

○曾良の句ゆえに、「おくのほそ道」の芭蕉の句ほどに注評解は多くないけれど、本文に採り入れられているだけに、いくらかの注評解はある。「菅菰抄」は「蠶を飼ふ家にはいろ／＼の物忌ありて婦女髪に油をぬらず齒に鉄漿をつけず誠に無懷氏葛天氏の民といふべし」とより蠶飼の事は神代よりありて日本紀に見えたり”とある、古注からして日本紀を

持ち出すのであるから、「古代」の語の注解があるわけではないのに、後人はそれに拘束されるは必然である。これらの古注を踏まえて、戦前の注解の代表的なものを挙げれば、

「私見 古代の姿を多くの註皆モンペ姿と解し居れども、嚴密に云へば此地方にて用ふるものはモンペの一種のフグミと稱(なづ)するものなり。土地の故老の談によれば、モンペは米沢地方にて多く用ひ、当地方にて用ふるものはモンペと尠し異りて、フグミと稱し、モンペは膝のあたりにて裂け居れども、フグミは足許の所にて裂け居るものなりとのことなり。此句は都会地にては見馴れぬフグミを穿きて蠶飼する田舎人の姿を面白く感じ、我が国上代人の思ひよせて斯く詠みしなり。曾良の句としては素朴にして飾気もなくすら／＼とよき句なり。」(飯野哲二著「おくのほそ道の基礎研究」)とある。地元の故老の談も聴取して「姿」については極めて的確に把握しているのであるが、「古代」については「上代人」を想定しており、曾良は田舎人の労働者から上代人を想起して俳趣をくみると解するのである。従前の諸注を集大成している阿部喜三男著「詳考奥の細道」では、諸説を踏まえた上での「通釈」で(ほんとうに、この

辺の人が養蠶をしてゐる姿は、古代の人のその姿を思はせる、趣きがあるわい。)と解する、飯野「私見」と同趣である。麻生磯次著「奥の細道講読」は随所に要を得た評解が見られるが、「古代の姿」について、諸説ありとして「菅菰抄」(蚕を飼う家には、いろいろ物忌があつて、婦女は髪に油を塗らず、齒に鉄漿をつけない風習があつたので、それを古代の姿といった)「奥のほそ道解」(蚕飼いは清浄を旨とし、燧石を打つとか、玉櫛をかけたたりするので、古代の姿といった)飯野氏の「基礎研究」(前出)を挙げ、「とにかく江戸近辺では見られない素朴清楚な姿に接して、そこに古代の姿を想像した」とし、「モンペをはき、木綿の筒袖を着て、蚕飼いに専念している簡素な姿は、大昔の人々もこんなであつたらうかと、そぞろに昔がしのばれるというのである。」と解する。松尾靖秋著「おくのほそ道全講」では、「単に都風の華美な姿と、田舎風の質素な様子とを思ひ比べて興味深く思つたのであらう。」と説き、曾良の想念にまで踏み込んだ実態把握の姿勢を示されながら、解としては「蚕を飼ひ、世話をしている人々の質朴簡素な姿は、全く古代の人の姿のようであることだ」とされるの

である。「姿」の実像把握は進んでいても、「古代」については千遍一律であり、この様態は諸解ともども一致しているのである。

○「古代」の語は、芭蕉の句文の中にはあまり見受けないようであるが（精査すればあるのかも知れない）、近來の辞典類に西鶴の「武家義理物語」の例が挙げられているので判ることく、西鶴の浮世草子の中には散見する語である。「新可笑記」各話の冒頭が全て「古代」の語で始まっているのはよく知られたこと、「古代徳ある人のいへり。」（巻一ノ一）のごとしである。定本の頭注に「各章「古代」という語で筆を起してゐるのは、「可笑記」の各章の起筆「むかし」になつたのである。」とある、西鶴自身「本朝桜陰比事」の各話冒頭は「むかし」で始めているのであるから、「新可笑記」もそれで始めてもよかつたのであるが、「可笑記」のもじりとしての「新可笑記」であつてみれば、一ひねりする必要があつて「古代」としてみたのであろう、要は説話の冒頭における常套的用法としての「古代」であり、お伽噺の「ムカシムカシ」に当たるといふのである。こうした決まり文句以外にも散見する「古代」の語を恣意的に挙げてみよう。「武家

義理物語」には、辞典に引例された外に、「又松風とて尾舁鳴海あたりの浜里に獲人のむすめなるが。浦そだちには。めいようるはしく。古代須磨の蟹の松風の女にはをとるまじき風義なれば。」（巻二の三）「江州田上川の瀬にかはりて。古代稀なる洪水。岸根の松柳もほれて。田地荒野なれば。」（巻三の五）など見られ、「日本永代蔵」では、「古代にかはつて、人の風俗次第著になつて、諸事其分際よりは花麗を好み」（巻一の四）ともあり、好色ものでは「好色一代女」に「古代は、縁付の首途には親里の別れをかなしみ、泪に袖をしたしけるに、今時の娘さかしくなりて、」（巻一の一）とある。「好色一代女」の例では、大系本の頭注に「古代」といっても大昔のことではなく、大体近世初期をさしている。」とあつて、後の「今時」という語と対語的用法である。「日本永代蔵」の場合も、大系本の頭注に「昔。ほぼ明暦の大火を境として庶民の風俗が華麗になつた。」とあつて、少し後に出てくる「近年小ざかしき都人の仕出し」の「近年」と対照的表現として使われているようである。「近年」について大系本の頭注は「延宝以降をいう。」と限定する。これらからは、「今時」

「近年」という語と対照となる「古代」という語が、ともに近世初頭を指す語として用いられていることが判る。これに對して「武家義理物語」巻二の三の例は、平安朝という限定された時代を指しており、更に辞書引用の巻一の四及び巻三の五の例は、無限定の古い時代を指しているのである。巻三の一に「近代は武士の身持。心のおさめやう。各別に替れり。むかしは勇をもつはらにして。」という例あり、「むかし」の対語として「近代」があり、「むかし」が「古代」と同義語だとすれば、「古代」の対語として「今時」「近年」「近代」などがあることになる。同時代人たる西鶴の「古代」の使用例がかくのごとくとすれば、曾良の句の解にも参考となるはずである。ここで、角川の「古語大辞典」の説明を想起すればよい、「今日、現代と對比して中昔などの称呼とともに時代を区分していうに用いる」といふのであつた。即ち「古代」は、今日とか現代とかと對比する古い時代なのであり、今の歴史学の区分で言えば、原始時代から近世初頭までの広い時代のいずれかを指すのである。曾良の句に即して言えば、「古代の姿」を「万葉人のような姿」と解しても間違っているわけではないのである

が、選択の幅は広いのであって、そこまで限定して解する必要もないのである。

○如上でありながら、諸解すべてが万葉人とか上代人とか古代の人とかと言う限定をした解を示しているのは何故か、それは尾花沢のところと載せられている四句全体の句の姿、殊に芭蕉の句である。『這出よかひやが下のひきの声』の解が念頭にあったからであると思われる。この句も、諸解ほぼ一致しており、芭蕉は『朝霞鹿火屋が下になくかはづ声だに聞かばわれ恋ひめやも』、『万葉集』卷十もしくは『朝霞香火屋の下に鳴くかはづしのびつつありと告げん児もがも』、『万葉集』卷十六を踏まえてこの句を吟じたとする。『かひや』には『蚊火屋』『鹿火屋』『銅屋』など諸説あって歸一しないが、芭蕉は『銅屋』と解して（顕昭の『袖中抄』にその説ありと『菅菰抄』以来説かれている）、この句ありというのである。万葉の歌は、どちらも『かひや云々』は序詞であって、主題はあくまで下二句にあるのであるが、芭蕉はその序詞を俳諧化したというのが通説のごとくである。ただ、勝峯晋風の『奥の細道創見』では異見が述べられている。その説、旧注が必ず万葉の朝霞の歌を踏まえているとした上で『偶然

の一致として、例へ朝霞（中略）の古歌があるにしろ、その語を套襲したといふ説は断乎これを拒否してよからう。解釈上の引歌は、作者がそれを知らずしては意味をなさない。』として武隈の句の場合を引例、更に『この句のかひやが下の万葉に基くといふのは作者の関知しない、註者その人の勝手な引用癖のいたすところである。』と極論される。芭蕉が万葉のこの歌を知らなかったのだという立場からの立論であるが、私にはこの説の当否を判定する能力はない。ただ、この句に関して言えば、万葉を踏まえたのだとすれば、あまりに語句が付き過ぎて剽窃という非難を受けかねないものであり（剽窃などという言葉は、近世の文学を評するに不当であること承知の上で使用したのであるが）、『おくのほそ道』の流れにおける句境の高まりということと考えると、これではあまりに芭蕉の句作りにおける気働きを感じし得ないことになるとは言えよう。その上、尾花沢の四句を並べてみて、万葉にかこつけた方がより理解を深めるといふものでもないような気がしないでもない。更に言えば、芭蕉と万葉の関係はいかがなものなのであろうか。少なくとも『おくのほそ道』における発句で万葉に結び付けて

解しなくてはならないものは他に見当たらないようであるし、この旅における芭蕉の想念は、通時的に言えばせいぜいさいさかのぼって『源氏物語』の平安まで、少くも奥羽地方では西行・能因の歌枕を訪う旅であったこととて、多く鎌倉から室町の時代をたゆたっていたこととくに思うのであるがいかがであらうか。それはそれとして、この句の解が諸注のごとくであったとしても、その雰囲気では芭蕉の句をまで評解する要はないはずである。

○曾良の『俳諧書留』には、須賀川での俳諧興行の記録『風流の』の歌仙の前に、『蠶する姿に残る古代哉』という形で著録されている。そして『風流の』の歌仙の中で、等射の『六十の後こそ人の正月なれ』という句に付けて、『蠶飼する屋に小袖かさなる』と揚句を吟じている。前句との付け合いについては、今は問わない、恐らく曾良の胸中において、この句は『古代の姿』の語句と相映発しているに違いないのであるが、この句の鍵である『小袖』の語からは、万葉人の姿は浮かんてこないようである。銅屋の内外で蚕飼のために忙しく立ち働く人たちを見た曾良は、印象的な衣服との関連から『小袖』を取り合わせて句作りしたのであろう。恐らく、下はツグ

ミで、上は筒袖で丸衿（盤領）の質素な労働着姿から「小袖」の語を連想したのではないだろうが、そこには旧い時代にさかのぼって連想を働かせたとしても、せいぜい平安朝までの人の姿であつたろう。「小袖」はそういうもの、むしろ当代人の「小袖」と言うのが正しいのかも知れなかった。

○芭蕉や曾良が「おくのほそ道」の旅に出立した頃、世は正に服装革命の時代で、都会には新しく美華なファッションが次から次へと生まれていったこと、衣裳比べなどという馬鹿馬鹿しいことのあつた当時の風俗に徴して明らかである。今に残る元禄袖というのは、従前の筒袖の衣服観を根元的にくつがえすものであつたろう。かくのごとき流行の有様を芭蕉や曾良がどう感得していたか知らないけれど、東北の農山村（尾花沢は農山村とは言えなからうが、江戸に比すれば田舎であつたし、ここは須賀川としてもよいのである。）で見聞した養蚕のための労働着に、「信長時代の仕立着物」「日本永代蔵」巻一の二を想起して「古代の姿」と表現してみたのではなかったか。都会人で当然時代の流行には理解を示しそうな西鶴でも、その時代後れの様子を冷やかしかし気味ではあるが、「信長時代の

仕立着物」を着た商人を「風俗律義」と評し、「此商人、内蔵には常燈のひかり、其名は綱屋とて武蔵にかくれなし。」と出世させているのである。伊賀上野の生まれの芭蕉と信濃上諏訪の生まれの曾良という元来田舎人だつたこの二人、それが江戸を跡に旅立っていく。その二人にとっては、「唯無智無分別にして正直偏固の者也」という仏五左衛門を「剛毅木訥の仁に近きたぐい、気稟の清質を尊ぶべし」と評したと同じ感覚で、養蚕に励む人たちの労働着を見て「古代の姿」と感銘させられたのではなかつたろうか。この句を吟じた曾良、それを「おくのほそ道」に採り入れた（あるいは改作の手を加えた）芭蕉、この二人にとって、「古代」の語を西鶴と同じ語感で用いたと解されても、少しも異議を申し立てる気持にはならないのではなからうか。「浅ましく下れる姿」など評したからと言って、ここで西鶴を忌避するほどのことはないのである。「古代の姿」に万葉人を想起する方が、一層俳趣が感じられ、更にはそうした方が蕉風の理念にかなう解釈になるというものでもないであらう。今は、「古代の姿」から万葉人のそれを想起するという呪縛から解き放たれるべきだとして、一説とする。演

習の過程で生じた一説である。

○この四月も、国文学科の先生方に異動があつた。転出されたのは岩崎・綾目の両先生であり、転入されたのは杉本・田口の両先生である。近代文学担当の先生方の大異動、鳴門教育大学に転出された田辺健二先生以来、近代文学担当の先生方は異動が多く、てんやわんやである。

○岩崎文人助教授は、母校の広島大学学校教育学部助教授として転出された。先生は、昭和四十二年広島大学教育学部東雲分校を卒業後、広島大学大学院文学研究科に進学され、昭和四十四年文学修士号取得、岡山県下の公立高校の教諭となられ、後に川崎医科大学附属高校の教諭として教育に専念されると同時に、専門の国木田独歩研究の論文を次々と発表しておられた。昭和五十年四月から本学の講師として近代文学の講義と演習を担当していただいた。昭和五十三年七月助教授昇格、今春三月広島大学学校教育学部助教授として転出されたのである。先生は、国木田独歩研究を着々と進められるとともに、近代小説全体の流れにも目をくばって研究の幅を広げられつつあつたけれど、その反面校務にも精励され、就職部の主任として学生の就職活動の

指導も熱心にしていただいた。その上、文教科国文学会の運営も一人で引き受けてくださり、数年前に完成した会員名簿も先生の努力によって陽の目を見たのである。本学にご赴任後十二年間、本学のためにお尽くしくくださった、こうした先生を失うのは本学にとって大打撃であるが、今後也非常勤講師としてご来学くださることもあろうし、先生の研究が大成することを祈って、先生の転進を祝福したいものである。

○綾目広治講師は、岡山の清心女子大学文学部講師として転出された。先生は、京都大学経済学部を昭和五十二年卒業、直ちに東芝に入社して実業人として出発されたのであるが、一念発起、昭和五十三年から一年間広島大学文学部の研究生となられ、昭和五十四年に広島大学大学院文学研究科に入学、昭和五十七年に文学修士号を取得、そのまま博士課程後期に在学、本学へは昭和五十九年四月、近代文学担当の講師としてご赴任願った。先生は、小林秀雄研究を基盤として日本近代評論史研究という大きな構想のもとに研究を続けられ、着々とその構想の完成に努めておられた。ところが、先生の恩師である磯貝英夫先生（元広島大学文学部長）がご定年で清心

女子大学の国文学科の責任者として転出されたところ、そこに近代文学の欠員が生じたのを機会に、先生は再び磯貝先生の膝下で研究をふくらませたいとの希望を抱かれ、今回の事態となったのである。本学にとってはこれからの人、大いに将来を期待していただけに残念であるが、先生の清新な研究が結実することを願って、前途を祝福したいものである。

○岩崎・綾目の両先生に替って、杉本春生教授、田口律男講師のお二人が新しくご赴任くださった。杉本春生教授は、京城法学専門学校を昭和二十年九月ご卒業、内地送還の苦勞をなめられ、昭和三十二年より札幌短期大学講師、昭和四十三年助教、昭和四十七年教授として近代文学の講座を担当しておられたが、ご病氣のためほとんどご出講なく、岩国において執筆活動が続けられ、詩作をされるとともに近代詩の評論・研究の著作を数多く出版された。中国新聞の詩壇の選者としても活躍されているが、その間広島大学文学部、広島女子大学文学部、山口女子大学文学部、比治山女子短期大学などに非常勤講師として近代詩を講じられてきたが、昭和五十九年から岩国短期大学の教授として就任、この四月

から本学の大学院の近代文学講座担当の教授としてご赴任いただいた。ご就任早々に病氣再発され、ご出講されていないけれど、一日も早いご平癒をお祈りしている。

○田口律男講師は、山口大学人文学部語文学科国文学専攻を昭和五十七年にご卒業、同時に広島大学大学院文学研究科に入学、昭和五十九年に文学修士号取得、引き続き博士課程後期に在学して昭和六十二年に博士課程単位修得と同時に本学にご赴任願った。近代文学担当である。先生は、横光利一研究を切り口として近代文学の諸相を解明しようとしておられるようである。本年度の文教科国文学会でも研究発表してくださったけれど、日本近代文学者の外国体験と、それがいかに日本近代文学に大きな影響を与えているかあるいはいかにについて、広く壮大な視野のもとに考究されようとしておられる面もうかがわれ、今後の研究の進展が楽しみな新進気鋭の士である。再々言、期してまつべし。

○昨年十月、下垣内和人・小川輝夫の両先生が、更に今年四月、井爪康之先生が教授に昇任された。お三人とも、着々と研究成果を挙げられていることは衆目の一致するところであるが、今後一層研究に教育に精進してくだ



することであろう。何よりおめでたいことである。

○文教国文学会は、六月十三日（土）に開催された。卒業生の橋本里美さん（文国第十七回卒業） 小川恵子さん（文国第十七回卒業）の体験発表、院生の好村友江さん、田口律男講師、角重始助教授の研究発表あり、最後に広島大学教育学部日本語学科教授の木坂基氏に講演をお願いした。それぞれ充実した発表であって、聴講者に深い感銘を与えた。文教国文学会が、やっと一人前になったかとの感がある。学会終了後の懇親会も、始めて学内の文教ホールで開いた。多くの学生が参加してくれて、研究意欲の盛り上がりを感じたことである。

○本年度は、研修旅行も盛んである。殊に書道専修の学生が中国本土に金石文の実地踏査研究のため、今夏出かけることとなった。約十日間の中国訪問であるが、一層の研究成果が期待され、国際化の時代にふさわしい企画とも言えるであろう。文国三年も奥の細道の研修旅行として日光から白河まで出かけることになっているし、短国の方でも企画があるようで、あらゆるところで研修の熱気が感じられる。ともあれ、二年もしくは四年の修学

期間を有意義に過ごしていただきたいものである。

○倉卒の間に書き流した冗にして漫なる後記らしからざる後記を終わる。

（六二・七・三〇）

横山邦治

# 文教國文學 第二十号

昭和六十二年十月四日 印刷  
昭和六十二年十月九日 発行

（非売品）

編集者 広島文教女子大学国文学会

代表 湯之上 早苗

発行所 広島市安佐北区可部東

一丁目二番一号

広島文教女子大学

国文学研究室内

広島文教女子大学国文学会

（振替）広島六一三四八九四

印刷所 溪水社